

国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代の漢字

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001576

現代の漢字

国立国語研究所

昭和49年2月

I 漢字調査

1. 国語研究所の漢字調査の性格

漢字調査またはそれに類する名称を冠した調査は、戦前戦後を通じて、数多く存在する。そして、その対象も、新聞・雑誌・教科書・科学論文・人名・地名など、多岐にわたっている。国立国語研究所（以下「国研」と略称）が行なってきたいくつかの漢字調査は、一面では、これらの一般の漢字調査と共通する性格を持っているが、他の面では、独自の特徴を有していることを指摘できる。

一般の漢字調査の特徴をもっともよく示しているのが、新聞社や通信社などで行なわれる、文字出現調査というような名称を持ったものである。

この種の調査では、活字や漢字テレタイプ
のキーボード上の文字がどのような頻度で用
いられたかを集計することによって、内字と
外字の選別の資料としたり、キーボード上の
文字の排列の際に参考としたりすることを主
な目的としている。

右のような調査は、言わば漢字を個体とし
ての文字とみるところに特色がある。われわ
れが行なってきた調査も、一面的には、そう
した特徴を持っており、調査の結果が右のよ
うな目的のために利用されることも不可能で
はない。しかし、漢字は、個体として、かな
・ローマ字・数字・句読点などの表記記号と
同等の資格を持つとともに、語を表記する際
に、その分節的な音を表わすだけでなく、な

I 漢字調査

- 1 国語研究所の漢字調査の性格
- 2 国語研究所の漢字調査の概要
- 3 調査に出現した漢字の数

II 漢字使用の実態—量的構造の分析—

- 1 漢字の使用量
- 2 使用率分布
- 3 新聞の漢字と雑誌の漢字
- 4 層別にみた使用状況
- 5 制限範囲別にみた使用状況

III 漢字研究の方向

- 1 漢字はどのような言語単位を表わすか
- 2 漢字かなまじり文の機能
- 3 語表記の研究
- 4 語構成の研究

んらかの言語単位との対応を有するところに
特徴がある。われわれの漢字調査に一貫して
いるものは、そうした語との対応関係におい
て漢字をとらえようとする姿勢であり、これ
までの漢字調査がいずれも語彙調査と併行し
て行なわれてきた理由もそこにある。

しかしながら、基本的には、右に述べたよ
うな方向をめざしつつも、これまでの調査
で、その目的が十分に完遂されたとは言いが
たい。第IIIの章で述べるように、それは、今
後に多くの課題を残している。

むしろ、これまでの成果として示すことの
できるのは、漢字使用の実態を量的な構造と
してとらえることによって得られた、いくつ
かの分析結果である。すなわち、(1)どのよう

な種類の漢字が、(2)どのような分野で、(3)どの程度の出現確率で、使用されているかというものがその中心になる。それについては、第IIの章で概要を説明する。

このような分析の理論的うらづけとして、計量語彙論との関係を見のがすわけにはいかない。語彙を語の集合体として、計量的に分析することによって得られた、いくつかの法則は、ある母集団から標本として採集された漢字の集合に対しても、おおむね適用できることが明らかになっている。このようにして、漢字の使用頻度を統計的にとらえるとともに、それがどのような語を表わすのに用いられたかということも明らかにしようとしてきた点に、国研の漢字調査の特徴をみることもできる。

語彙調査に電子計算機が使用されるようになるとともに、漢字調査もまた、機械処理の問題と直面することになった。語彙調査以上の精度が要求される漢字調査にとって、機械処理上の未解決の問題は、いっそう困難な障害として、存在している。これらの障害を克服して、大量のデータを解析することによって、漢字使用の量的な構造を把握するとともに、すでに蓄積され、さらに量を加えつつあ

る資料をもとにして、現代語の漢字の用法・機能について記述することが、今後の課題である。

2. 国語研究所の漢字調査の概要

国研における漢字調査は、先にも述べたように、語彙調査と併行して行なわれてきた。したがって、調査の規模や対象については、語彙調査と重複するところが多いので、ここでは、簡単にしかふれない。詳しくは、表1の〈発表物〉の項にあげた文献、または、左記の論文によることを希望する。

▽既に掲載された「国立国語研究所の歩み」のうち、今回のテーマと特に深いかわりを持つのは、次の二つである。

- ① 1・コンピュータ言語学(48年6月号)
- ② 5・現代語の語彙(48年10月号)

(1) 婦人雑誌の漢字調査

調査の主たる対象は、「主婦之友」であるが、補助として、「婦人生活」(実用記事)についても調査を行ない、延べ約六万、異なり二千九百七十四字を得ている。報告書には、両誌に出現したすべての漢字が載せられている。なお、「主婦之友」の結果についての使用度数分布表は、表1の(3)現代雑誌90誌の発

表物の項にある報告書に記載された。

(2) 総合雑誌の漢字調査

語彙調査のために抽出した約四十分の一の標本のうち、さらに二分の一について調査を行なった。報告書には、使用度数九回以上の漢字千四百十七字について、音訓別の使用度数を付した表のほか、使用度数九回以上の表外漢字とその用法の表、表記にゆれのある語の表などを収める。

(3) 現代雑誌九十種の漢字調査

語彙調査の標本となった約四十四万語のうち、約三分の二について調査を行なった。母集団からの抽出比は、約三百四十分の一になる。

報告書には、使用度数九回以上の漢字千九百九十六字について、五つの層ごとの使用率と使用順位を付した、「使用率順漢字表」、また、右の漢字をそれぞれについて、使われた音訓の種類・使われた語の種類・その語の異なる表記の種類とそれぞれの使用度数を付した、「用法別漢字表」を収める。そのほかに、使用度数八回以下の漢字をも含めた、「五十音順漢字表」も載っている。

(4) 現代新聞の漢字調査

昭和四十七年度に完結した「電子計算機に

表1 国研の漢字調査一覧

調査対象		語彙調査の 抽出比(約)	漢字調査の対象 となった標本の 延べ語数	字数		発表物
資料	期間			延べ	異なり	
(1) 婦人雑誌1誌 (主婦之友)	25.1~12	1/6	14.6万 (α)	17.0万	3,048	国研報告4「婦人 雑誌の用語」 (昭28)
(2) 総合雑誌13誌 (改造・世界ほか)	28.7~29.6	1/40	11.6万 (β)	11.7万	2,781	国研報告19「総合 雑誌の用語」 (昭35)
(3) 現代雑誌90誌 (五部門90誌)	31.1~12	1/230	29.2万 (β)	28.0万	3,328	国研報告22「現代 雑誌の用語用語一 第二分冊」(昭38)
(4) 現代新聞3紙 (朝日・毎日・読売)	41.1.1~ 12.31	1/60	55.6万 (α)	63.0万	2,879	国研資料集8「現 代新聞の漢字調査 (中間報告)」 (昭46)

(注)

表中の $\alpha \cdot \beta$ という記号は、語彙調査における語の長さの単位を意味する。 α 単位は、文節から付属語を除いたもの、 β 単位は、国語辞書の見出し語とほぼ等概念である。 $(\alpha$ 単位は報告4に、 β 単位は、報告12および21に規定がある。)

よる新聞の語彙調査」に伴って行なわれている調査で、現在、作業が進行中である。標本全体の延べ字数は、約百八十万字(推定)であるが、漢字調査では、広告(案内広告)・表(番組欄・株式相場表など)を除いているので、約百万字が延べ字数として得られる見込みである。

なお、この調査では、語彙調査の約九分の一にあたる量について、漢字の使用度数・用法についての試験的集計を行ない、ついで、三分の一に相当する量について、使用度数のみの中間集計を行なった。後者の結果は、資料集として発表した。

その内容は、出現した二千八百七十九字のすべてについて、全体の利用率および使用度数を示した表(使用度数五回以上の二千四百十三字については、層別の使用度数をも示した)と、話題による十二種類の層別区分ごとに、使用度数の多い漢字について、層内の順位・使用度数を示した表からなる。以下で、新聞の調査結果として引用するのは、この中間集計のことである。

右の(1)~(4)とは性質の異なるものとして、次の二つの調査・研究がある。

表2 国研の調査に出現した漢字の数

階級点	当用漢字					表外漢字				計	
	教漢	育字	準教育漢字	⊖補正漢字	その他	小計	⊕補正漢字	人名用漢字	その他		小計
0～3	550		22		30	602	1	2	5	8	610
4～7	260		64	1	190	515	4	6	10	20	535
8～11	58		22	7	284	371	10	17	67	94	465
12～15	8		7	2	222	239	10	22	208	240	479
16～19	2			6	76	84	3	28	408	439	523
20～23	3			10	23	36	1	12	1252	1265	1301
計	881		115	26	825	1847	29	87	1950	2066	3913

(注)

- * 1 階級点とは、各調査ごとの度数順位を一律に500番でくぎり、次のように点数を与え、4調査の階級点を合計したものをいう。

(順位)	(点数)	⋮	[例] 此	(調査)	(順位)	(点数)
1～500	0	⋮	(1)	2479	4	
501～1,000	1	⋮	(2)	762	1	
1,001～1,500	2	⋮	(3)	1358.5	2	
1,501～2,000	3	⋮	(4)	出現せず	6	
2,001～2,500	4	⋮			—	
2,501以下	5	⋮				
出現せず	6	⋮				
					(合計階級点)=13	

- * 2 表中の当用漢字および表外漢字中の小区分は、下記に示した、国語施策による制限範囲の別による。
- ・教育漢字……「当用漢字別表」に示された漢字。
 - ・準教育漢字……昭和43年7月に告示された改訂学習指導要領で、小学校での学習が認められた漢字。
 - ・⊖補正漢字……「当用漢字補正案」(昭29.3国語審議会)で削る候補となっている漢字。
 - ・⊕補正漢字……同上で加える候補となっている漢字。人名用漢字と重複する「尚・杉・齊・竜」の4字はこの項に入れてある。また、字体の変更(燈→灯)による「灯」も、ここを含む。
 - ・人名用漢字……「人名用漢字別表」に示されている漢字。
- * 3 当用漢字で出現しなかったのは、「痘」と「璽・朕」(⊖補正漢字)の3字である。また、人名漢字では、「稷」が出現していない。

(5) 総合雑誌の表外字調査

昭和二十七年七月から二十八年六月までの一年分の四種類総合雑誌について、約十分の一の抽出比で標本をぬき出し、表外字の種類・使用比率(全体と記事別)・用語例などについて調査したものである。

〈発表物〉「当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究」(「国研年報5」所収・昭和29年刊)

(6) 漢字機能度の研究

漢字が、単語または造語要素としてどのように働いているかを調べ、各文字の機能上の特徴を数量的に明らかにすることを目的として行なわれた。作業としては、前記(1)~(4)の調査に出現したすべての漢字について、その字を含む用語例を記入した、「総合漢字用例表」を作成した。また、この用例表を利用し

た、いくつかの分析が行なわれた。

〈発表物〉「語彙調査四種の使用度による漢字のグループ分け」(「国研LDP」(語彙調査月報別冊)9)所収・昭和46年刊)

▽なお、現代語以外では、明治期の郵便報知新聞を対象とした調査があるが、ここではふれず、文献をあげるにとどめる。

①「明治初期の新聞の用語」(「国研報告15」昭和34年刊)

②「明治初期の新聞の用語」(「国研論集3」ことばの研究)所収・昭和42年刊)

3. 調査に出現した漢字の数

前記(1)~(4)の調査に出現したすべての漢字を、出現順位による段階と制限範囲による種類とによって分類したのが表2である。

(この表は前記(6)の項にあげた文献に基づいて作製した。)

表3 各漢字調査の上位50字

順位	婦人雑誌	総合雑誌	雑誌90種	新3	聞紙
1	一人	日	二三	大東	十
2	二	三	大東	十	会
3	三	日	二	三	大
4	四	日	二	三	大
5	五	日	二	三	大
6	六	日	二	三	大
7	七	日	二	三	大
8	八	日	二	三	大
9	九	日	二	三	大
10	十	日	二	三	大
11	一人	二	上	生	出
12	二	上	生	出	方
13	三	上	生	出	方
14	四	上	生	出	方
15	五	上	生	出	方
16	六	上	生	出	方
17	七	上	生	出	方
18	八	上	生	出	方
19	九	上	生	出	方
20	十	上	生	出	方
21	見	日	中	大	三
22	二	中	年	自	学
23	三	年	自	学	会
24	四	年	自	学	会
25	五	年	自	学	会
26	六	年	自	学	会
27	七	年	自	学	会
28	八	年	自	学	会
29	九	年	自	学	会
30	十	年	自	学	会
31	家	女	気	思	心
32	二	女	気	思	心
33	三	女	気	思	心
34	四	女	気	思	心
35	五	女	気	思	心
36	六	女	気	思	心
37	七	女	気	思	心
38	八	女	気	思	心
39	九	女	気	思	心
40	十	女	気	思	心
41	来	行	年	下	小
42	二	行	年	下	小
43	三	行	年	下	小
44	四	行	年	下	小
45	五	行	年	下	小
46	六	行	年	下	小
47	七	行	年	下	小
48	八	行	年	下	小
49	九	行	年	下	小
50	十	行	年	下	小

いて、各分野を網羅した、大規模な調査を行なう必要がある。その結果は、基本漢字や正書法を考える上で基礎的な資料となりえよう。

調査の年代・対象・規模などによる相違を無視して言うならば、延べ約百二十万字に対して、約三千九百種類の漢字が出現したことになる。範囲を新聞・雑誌に限れば、調査規模を飛躍的に大きくしないかぎり、漢字の異なり数がこれ以上そう多くなるとは考えられない。したがって、この数字は、現代社会で使用される漢字の種類を考える上での一つの目安となるものと思われる。

しかしながら、調査対象の性格によって、使用される字種に出入りがあることは、表1からもうかがわれる。また、同一の漢字でも、使用分野によって、使用頻度に差があることは、表3からも明らかである。そうした違いは、結局は、それぞれの調査対象の語彙構造の差に基づくものであり、漢字使用の実態をとらえるためには、現代語の書きことばにつ

Ⅱ 漢字使用の実態 — 量的構造の分析 —

一定の範囲に使用される語の総体を「語彙」とよぶならば、そこに用いられる漢字の総体を「字彙」あるいは「漢字彙」ということも不可能ではなさそうである。しかし、そのような用語が使われることはあまりないし、あっても、右のような概念とは異なる意味あいを帯びている場合が多い。このことは、近年、語彙研究の分野で、計量語彙論や語彙構成論がさかんになったのに対して、文字（漢字）研究の分野では、使用漢字の総体というとらえ方があまり行なわれていないことと無関係ではない。

国研の漢字調査に伴って行なわれた、いくつかの分析は、現代語の書きことは資料としての雑誌や新聞に使用される漢字を量的な構

造としてとらえようとする試みであった。しかし、語彙論における、語種構成論や品詞構成論に相当するものは、まだ十分には開拓されていない。以下では、漢字の使用度数分布・層別区分による使用量・国字施策による制限範囲別の使用状況などについて分析した結果のいくつかを紹介する。なお、以下で、雑誌というのは現代雑誌九十種の調査を、新聞というのは、現代新聞三紙の調査を、主としてさすことにする。

1. 漢字の使用量

現代語では、およそどの程度の種類の漢字が用いられるかということ、先の表1や表2から推測がつく。しかし、それが増加の傾

図1 新聞を対象とした漢字調査の比較

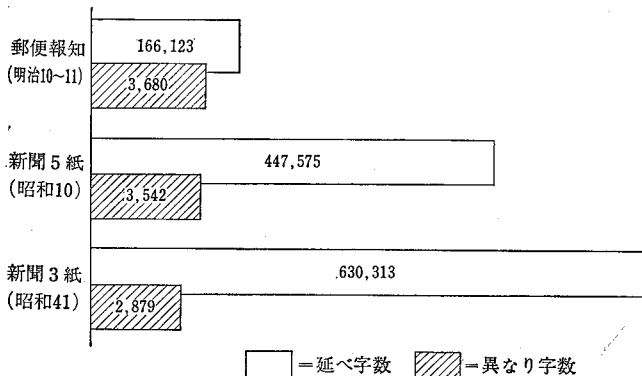
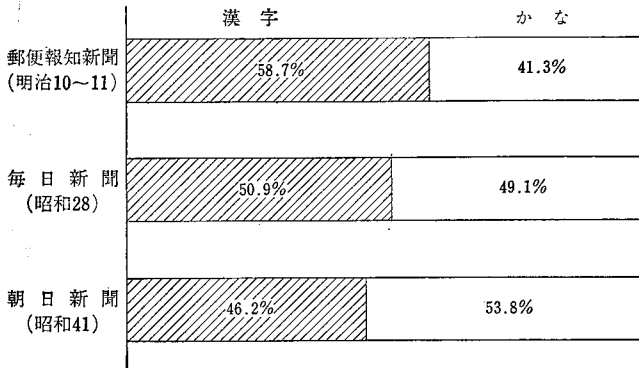


図2 漢字含有率の比較（新聞）



向にあるのか減少の傾向にあるのかということとは、過去のデータとの比較によらなければならない。

図1は、新聞を対象とした漢字調査三種類について、延べ字数と異なり字数を比較したものである。

▽「新聞5紙」の結果は、次の文献によった。
カネモジカイ編「新聞ノ漢字数数シラベ」・昭和16年刊

同じ新聞とはいっても、明治初期のそれと現代のそれを同列に扱うことには問題があるが現代になるほど、使われる漢字の種類が少なくなっていることが、調査規模との対比から明確である。もちろん、新聞では、漢字制限を実施している（それは昭和十年当時でも行なわれていた）から、そのことを考慮に入れないければならないが、字種が減少しつつあるという事実そのものは否定できない。

漢字の種類が少なくなっているということが、ただちに漢字の使用量の減少と結びつくとはいかぎらない。そのことをたしかめる一つの尺度として、漢字の含有率を調べる方法がある。文中に出現した表記記号の総数に対する漢字の比率を算出するものである。図2は、各種の調査の結果を、漢字とかな（ひらがな・かたかな）の比に換算したものである。

▽毎日新聞の結果は、「本社使用活字 使用度数調査表」・昭和28年刊によった。朝日新聞の結果は、現代新聞三紙の調査で、部分的に標本を抜き出して調べたものである。

明治期のものはともかく、昭和二十八年と四十一年との結果に差が見られることが注目される。現代の新聞では、四十パーセントを

すこしこえる程度ではないかと考えられる。すなわち、含有率においても、漢字は、減少の傾向にあることが推測されるのである。

漢字の使用量が、漢字の種類・含有率の両面で減少の傾向を示しているとすれば、その要因として、語との関係で、次のようなことが考えられる。すなわち、(1)漢字で表記される語が使用されなくなった、(2)今まで漢字で表記していた語をかなで表記するようになった、の二つである。この問題について、直接に解答を示す資料は、現在、われわれにはない。今後の研究課題である。

2. 使用率分布

使われる漢字の種類について、おおよその見当がついても、それがすべて同じ価値をもって使用されているわけではない。標本調査の性格上、出現度数の低いものについては、当然、信頼度もまた低くなる。そこで、比較的よく使用される漢字の範囲を確定するためには、使用率分布の分析が必要になる。

表4は、新聞と雑誌について、使用率の高い順に漢字を並べた表の、上位何字で、総使用数のどれくらい割合を占めるかを示したものである。すなわち、上位五百位ぐらいま

表4 新聞と雑誌の使用率分布の比較

	新聞	雑誌		新聞	雑誌
上位の10字	10.0%	8.8%	全体の80%	499字	638字
50	27.5	25.5	85	615	777
100	39.9	37.1	90	781	992
200	56.4	52.0	95	1,068	1,358
500	80.0	74.5	96	1,156	1,479
1,000	94.1	90.0	97	1,269	1,617
1,500	98.4	96.0	98	1,421	1,832
2,000	99.7	98.6	99	1,661	2,157
2,500	99.9	99.5	100	2,879	3,328
3,000		99.9			

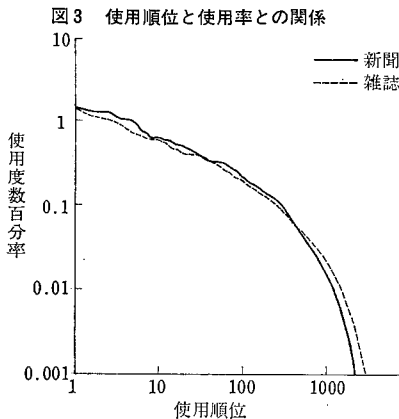
では、全体に対して占める割合の増加率が高いが、それより下位になると、増加率はゆるやかになり、千五百位あたりからは、ほとんど停滞してしまふ。ただし、新聞と雑誌では、字種の内容に出入りがあるから、おおざっぱな言い方をすれば、約二千字が比較的に使用される漢字の範囲と言えよう。

このことは、図3からも確かめることができる。使用順位が上位の漢字では、曲線の落ち方がゆるやかだが、四、五百位あたりから急になる。使用率が○・〇八パーセント以上の漢字は、新聞では三百二十六字、雑誌では三百十一字であるから、出入りを考えると、約五百字がひじょうによく使用される漢字ということになる。

右に述べたことは、新聞と雑誌を合わせた分析であるが、詳しくみると、両者には、多少の相違がみられる。まず、新聞では、延べ字数約六十三万に対して、異なり字数が二千八百七十九であるのに、雑誌では、延べ二十八万字に対して、異なりで三千三百二十八字も出現している。これは、ひとつには、新聞の当用漢字表の範囲を守ろうとする姿勢が雑誌の場合よりも徹底していることのためでもあるが、新聞では、時間・場所・職業・年齢

などを表わす特定の語がくり返し現われやすいこと、各種の表で同一の漢字が反覆して使用されることなどにもよる。それに対して、雑誌は、広い範囲の分野を対象とするために、それぞれの分野にしか現われない特殊な語を含むことが考えられる。

したがって、少ない種類の字で全体の高い割合を占める傾向は、雑誌よりも新聞に顕著である。新聞では、使用度数順上位五百字で、全体の八〇・〇パーセントを、千字で九四・一パーセントを占めるのに対し、雑誌では、五百位で七四・五パーセント、千字で九〇・〇パーセントである。図3でみると、使用順



位四、五百位までは、似たような曲線を描いているが、それ以下では、新聞のほうがカーブの落ち方がはやくなり、雑誌のほうがゆるやかなのがわかる。すなわち、全体としてよく使われる漢字の使用状況には、そう大きな違いはないが、使用度数の低いところでは、雑誌のほうがバラエティに富んでいることを物語っている。

3. 新聞の漢字と雑誌の漢字

新聞と雑誌に出現した漢字の種類を合わせると、合計三千五百八十六字になる。その内訳は、次のとおりである。

共通して出現した字……………二、六四一

新聞だけに出現した字……………二三八

雑誌だけに出現した字……………六八七

新聞だけに現われる字は、概して度数の低いものが多く、使用度数順上位千九百八十字(度数八以上)に含まれるのは、十三字である。これに対して、雑誌だけに現われる漢字のうち、五十字が上位千九百九十六字(度数九以上)に含まれている。したがって、新聞だけに出現する漢字は、全体としてそれほど大きな割合を占めていないのに対して、雑誌だけに現われる漢字は、新聞にくらべて、あ

る程度はたらいっていると言うことができる。

▽一方にだけ出現する主な漢字については、「国研資料集8」に例示してある。

共通してあらわれる漢字でも、使用頻度が同じであるとはかぎらない。使用度数順上位百字(延べ二百字)について比較してみると、異なり字数は百三十字で、共通しているものが七十字、一方にしか現われないものは、各三十字である。(雑誌では、広告を対象から除いてあるので、新聞についても、広告を除いた度数について比較した。)

「新聞で百位以内で雑誌では百位以内に現われない字」

員・化・回・海・開・関・機・議・教・京・土・産・市・相・政・川・全・定・天・電・藤・島・動・百・米・北・間・民・野・和
〔雑誌で百位以内で新聞では百位以内に現われない字〕

意・家・何・下・画・外・言・原・今・作・思・私・持・実・主・所・女・心・身・性・体・知・当・白・彼・物・法・用・来・話

右の六十字について、それぞれの漢字を用いて表記された語の用法を調べてみると、次のような特徴がとらえられる。(詳細は、「国研LDP(月報別冊)6」・昭和45年刊に載せてある。)

①新聞では、字音として使用されることが多く(音一九四・七パーセント、訓一五・三パーセント)、雑誌では、字音と字訓の比がほぼ等しい(音一五一・一パーセント、訓一四八・九パーセント)。

②雑誌では、和語の動詞に用いられるものが多いが、新聞では、漢語の名詞・サ変動詞の語幹に用いられることが多い。

③新聞では、固有名詞や機関・組織・地位・職業をあらわす語に用いられることが多い。

④新聞では、経済的活動を表わす語によく用いられ、雑誌では、精神に関する語に用いられやすい。

⑤雑誌では、代名詞や人間をさす語に用いられることが多い。

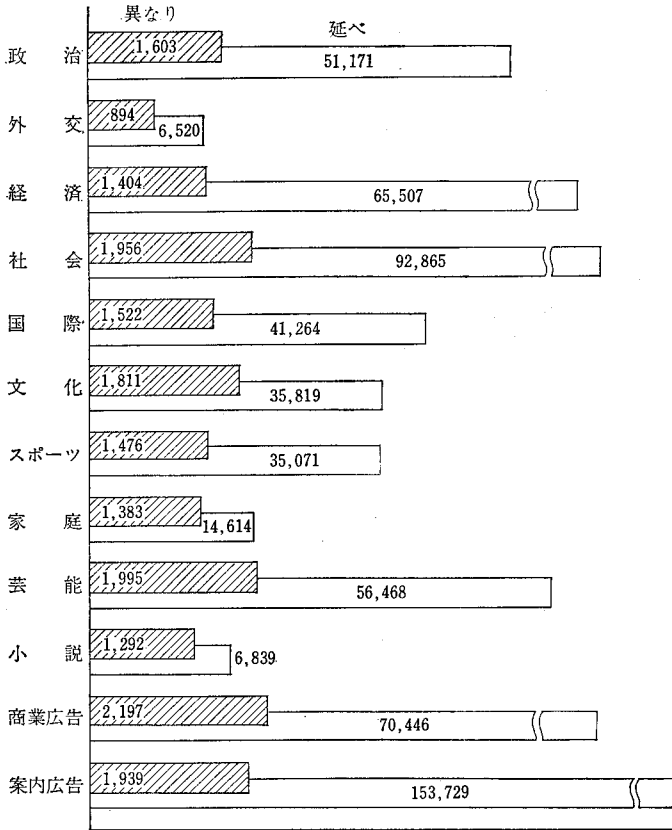
このような特徴は、漢字の使用が、単なる表記上の問題ではなく、調査対象の語彙構造と密接な関係を持つことを意味している。

4. 層別にみた使用状況

新聞の調査では、記事面を話題によって分類した十二の層別区分をたてている。同じ新聞記事であっても、それぞれに性格が異なり、漢字使用にもまた、いくつかの特徴がみられる。

▽雑誌の調査でも、五部門の層別分類を行なっているが、それについての分析は、次の文献

図4 各層別区分の異なり字数と延べ字数（新聞）



に載っているので省略する。
 ①岩淵悦太郎「現代語の用語用字」(『言語生活』・一五七号)
 ②斎賀秀夫「現代における漢字・漢語の実態」(『文学・語学』四一号)

図4は、各層ごとの異なり字数と延べ字数を示したものである。同じ広告でも、案内広告は、商業広告にくらべると、延べ字数に対して、異なり字数が少ない。商業広告がバラ

エティに富んでいるのに対し、案内広告は、内容がほぼ一定しているためである。同様のことは、株式の相場表を含む経済欄にも言える。表を示さなかったが、一定の字数でまかなわれる割合が高いのは、右の二つの層と芸能欄である。ただし、芸能欄は番組表に人名などの表外字が現われるので、延べ字数に対する異なり字数の比は大きい。

文化欄や小説は、延べ字数にくらべて、異なり字数が多い。これは、内容や題材が広範囲にわたることと、社外の学者・評論家・作家などの寄稿記事が多く、独自の用字がみられることによる。

それぞれの層で特徴的に使われる漢字を調べるために、次のような試みとしてみた。十二の層別区分から、それぞれ使用順位上位の三十字を選び、(A)十二の区分に共通して現われるもの、(B)九の区分に現われるもの、(C)五の区分に現われるもの、(D)二つの区分に現われるもの、(E)一つの区分だけに現われるもの、という五つのグループに整理したのが、表5である。

(A)と(B)は、新聞で頻繁に使用される漢字であるとともに、他の調査でもつねに上位を占める、現代語でもっとも基本的な漢字

表5 層別区分の上位三十字の分類 (新聞)

A	一・大・日・二・三・中・本・年
B	十・人・会・東・五・上・田・国 ・時
C	員・高・出・生・長・分・学・行 事・社・四・新・子・同・識・業 ・政・者・手・的・方・八
D	円・映・合・相・自・戦・山・対 ・電・発・米・民・万・名・連・ 気・京・区
E	104字 (略)

である。(C)のグループに属するものは、現代の新聞を代表する特徴的な漢字と言えよう。(D)・(E)のグループは、それぞれの層で特徴的に使用され、その層の特徴語彙と深いつながりを持っている。

たとえば、(D)のグループに属する「米・連・発」は、外交欄と国際欄でよく使用される。「米」と「連」は、「米国・米軍」・「ソ連・国連」などで共通に用いられ、「発」は、「ワシントン発」・「日発」のような接尾語的用法や「発表」などという語に使われる。また、「戦」は、国際欄とスポーツ欄に共通するが、国際欄では、「戦争・戦闘・戦線」などの語に使われ、スポーツ欄では、ゲームの意味の「対戦・作戦」や「決勝戦・一回戦」

などに用いられるというように、異なる意味を表わしながら、特徴漢字となっている。

(E)のグループに属する漢字の数は、層によってかなり異なる。政治欄では、「委・党・定」の三字、社会欄では、「前・六」の二字だけが、他の層と重複しない。つまり、政治欄・社会欄は、新聞の中でもっとも基本的な記事面であり、基本度の高い漢字によってまかなわれることを意味する。逆に、その層にしか現われない漢字を多く持つ、次のような欄は、他の層と異なる語彙から構成されているとみることができよう。

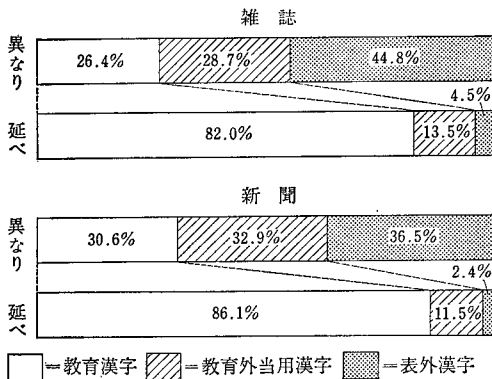
- 芸能欄……演・英・小・作・再・他・天・楽・郎・話・語・歌・曲・画 (14字)
- スポーツ欄……勝・野・球・選・打・投・第・壘・後・回 (10字)
- 経済欄……工・機・金・建・興・産・鉄・洋・和 (9字)
- 案内広告欄……千・通・歩・付・面・迄・歴・給 (8字)

5. 制限範囲別にみた使用状況

「当用漢字表」を中心とする、国字施策による各種の制限範囲別に、漢字の使用数をくらべてみると、興味ある傾向がとらえられる。

図5は、雑誌と新聞について、異なり字数

図5 制限範囲別の使用度数の比率



と延べ字数別に、それぞれの比率を示したものである。異なり字数では、当用漢字表に含まれない漢字(表外字)もかなりの割合に達するが、延べ字数では、ごく少ない比率しか占めていないことが注目される。また、当用漢字のうちでも、教育漢字の占める割合が圧倒的に高い。現在、小学校で学習を認められていない準教育漢字(備考漢字)百十五字をこれに加えると、新聞では、延べ字数の八十九パーセントが、義務教育で履修される九百九

十六種類の漢字によってまかなわれていることとなる。

また、表2によって、一定の階級点までの漢字の種類を合計してみると、表6のようになる。(表中の学習漢字とは、教育漢字と準教育漢字を合わせたものである。)これによれば、階級点15までの二千八十九字中、学習漢字は九百九十一字、当用漢字は千七百二十七字含まれていることになる。したがって、字種の内容を問題にしなければ、現在の制限範囲の数は、かなり効率の良いものと言える。

当用漢字でも、出現率の低い漢字は存在する。使用度数5以下の漢字は、新聞では百四十九字、雑誌では百二十字ある。(使用度数0のものも含む。)使用度数が0のもの、すなわち一回も出現しなかった漢字は、次のようなものである。

表7 よく使用される表外漢字

	婦人雑誌	総合雑誌	雑誌90種	新聞3紙
1	頃袖	頃袖	頃云	藤迄
2	脇脇	脇脇	頃云	崎崎
3	脇脇	脇脇	頃云	岡岡
4	脇脇	脇脇	頃云	阪阪
5	脇脇	脇脇	頃云	伊伊
6	脇脇	脇脇	頃云	斐斐
7	脇脇	脇脇	頃云	塚塚
8	脇脇	脇脇	頃云	之之
9	脇脇	脇脇	頃云	彦彦
10	脇脇	脇脇	頃云	堀堀
11	脇脇	脇脇	頃云	奈奈
12	脇脇	脇脇	頃云	須須
13	脇脇	脇脇	頃云	帷帷
14	脇脇	脇脇	頃云	崎崎
15	脇脇	脇脇	頃云	竜竜
16	脇脇	脇脇	頃云	鹿鹿
17	脇脇	脇脇	頃云	旭旭
18	脇脇	脇脇	頃云	弘弘
19	脇脇	脇脇	頃云	乞乞
20	脇脇	脇脇	頃云	鴻鴻
21	脇脇	脇脇	頃云	熊熊
22	脇脇	脇脇	頃云	仙仙
23	脇脇	脇脇	頃云	荻荻
24	脇脇	脇脇	頃云	駒駒
25	脇脇	脇脇	頃云	阿阿
26	脇脇	脇脇	頃云	蒲蒲
27	脇脇	脇脇	頃云	
28	脇脇	脇脇	頃云	
29	脇脇	脇脇	頃云	
30	脇脇	脇脇	頃云	

表6 階級点と制限範囲別の漢字数

階級点	学習漢字	当用漢字	表外漢字	計
3まで	552	30	8	610
7まで	896	221	28	1145
15まで	991	736	362	2089

痘・肤・璽(3字)

表外漢字でも、使用率が高いものがあることは、これまでの結果でわかるが、どのような漢字が用いられるかということになると、調査対象によって、それぞれ異なっている。

「新聞に一回も出現しなかった漢字」

韻・莖・儉・侯・擘
勺・詔・薪・鍾・壘
嫡・畝・勿・効・嚇
且・遵・脹・罷・濫
(20字)

「雑誌に一回も出現しなかった漢字」
蚕・式・丙・嗣・墳
弧・斥・殉・疫・諮
迭・陪(12字)
「新聞・雑誌ともに出現しなかった漢字」

表7にあげたうちで、四つの調査に共通しているのは、「藤・崎・岡・伊・之」の五字だけである。そして、新聞と雑誌では、様相が異なる。

新聞では、国有名詞以外は当用漢字表の範囲を守るといふ方針が徹底しているため、ほとんどが人名・地名に用いられている。そのほかでは、案内広告で用いられたもの(迄・乞)、社名に用いられたもの(斐)があるにすぎない。新聞全体の表外字の延べ使用率は、二・四パーセントであるが、それよりも高い割合を占めているのは小説(五・二パーセント)・スポーツ欄(三・九パーセント)・芸能欄(三・八パーセント)などである。

雑誌では、人名・地名のほかに、裁縫・料理などの専門用語に使われるもの(頃・袖・衿・脇・汁・噌)、戦前ではよく使用されたもの(頃・云・僕・誰・或)などがある。しかし、雑誌の調査は、昭和三十一年以前の資料を対象としているため、現在では、かなり事情が違っていると考えられる。雑誌九十種の調査の延べ使用率四・五パーセントという数字は、より新聞のそれに近づいているとみてよいであろう。

Ⅲ 漢字研究の方向

現代語における漢字の機能を調べるためには、漢字調査に基づいた量的な分析だけでは不十分なことは言うまでもない。表記要素・言語要素としての漢字の性格・特質についての記述的な研究が行なわれるべきであるし、量的な構造として把握する際にも、単に使用量だけでなく、漢字の性質に基づいた分析を行なう必要がある。この章では、右のような観点から、最近に行なわれた、あるいは、行なわれつつある研究を紹介する。

1. 漢字はどのような言語単位を表わすか

これまでの漢字調査でも、漢字の用法について、音訓、人名・地名などの使用状況についての研究は行なわれてきた。しかし、表語

文字としての漢字の機能を明らかにするには、言語単位との対応関係をいっそうはっきりさせておく必要がある。たとえば、同じ字音として用いられても、「人家（じんか）」と「住家（すみか）」の「家」は異なる単位を表わしているの見なければならぬ。また、これまでの調査では、①度が過ぎる②めがねの度が合わない③道路の渋滞度④氷点下三度⑤アルコール分四十二度などの「度」を合算してきたが、少なくとも、二〜三のグループに分ける必要であろう。

右のような観点から、現在進行中の「現代新聞の漢字調査」では、漢字の用法を次のように分類して最終集計を行なっている。（最小単位とは、語彙調査で設定した、現代語と

して意味になっっている最小の言語形式のことである。）

(1)漢字一字が一最小単位と対応しない用法

○人名・地名……日本・山梨・台湾・仏蘭

西

○熟字訓……田舎・足袋・家鴨・麦酒

○あて字（借字）……瓦斯・曹達・素晴しい・茶目（語源的に考えれば、味方・波

止場などもこのグループにはいる。）

○略語……私鉄・職安・家裁・学割（これ

らは、一最小単位より大きな単位と対応している）とみられる。これと関連して、

湖（みずうみ）・雷（かみなり）など、語

源意識のうすれているものは、一最小単位とみるが、朝日―旭・玉子―卵のよう

表8 新聞漢字調査
用語例表の一部

児	21/94	
異端	~	3
革命	~	2
混血	~	16
サリドマ		
イド	~	1
私生	~	2
新生	~	1
双生	~	1
∴		
肥満	~	2
風雲	~	1
平原	~	2
優秀	~	2
流行	~	1
数	~	9
(○~の母)		
数	—	2
(○歳~)		
—	—	~35
(幼稚園~ 言語障害~)		

に、二種類の表記がある場合に問題になる。
 (2) 漢字一字が一最小単位と対応する用法
 ○自立・派生の用法……肉・天・感じる・
 変な・現に・真の・山・空・書く・高
 い・静か
 ○結合の用法……海水・議会・行動・陸
 下・父親・山登り・足早・切り取る(字
 訓の場合には最小単位との対応が明瞭だが、字
 首では、陛下のように、意味との対応があいま
 いなものも少なくない。それらも一応ここに含
 む。
 ○接辞の用法……新校舎・不完全・故○○
 氏・連絡船・一般的・○○県・○○円・
 御菓子・○○川・○○様(字首の場合は、
 最小単位の一回以上の結合形についたものは、
 肺結核のようなものでも含める。性教育/可能
 性のように、前部分と後部分で異なる性格を持
 つものもあるので、位置による区別もする。)

以上のような用法の区別は、これまでの調
 査でも、それぞれの漢字の用語例に、部分的
 には注記されていた。今回の調査のねらい
 は、右のような情報を電子計算機に与えて、
 各種の表を作成し、量的な構造として把握し
 ようとするとところにある。
 ▽表8は、接辞の用法の用語例表の一部を示した
 ものである。
 ▽右の用法分類の構想は、次の論文に発表し
 た。
 野村雅昭「漢字調査の言語単位」(計量国語
 学「59号」)
 2. 漢字かなまじり文の機能
 表記論的な観点から、漢字の機能を問題に
 しようとする試みとして、所員野村雅昭は、
 次のような調査を行なった。

▽調査の報告は、次の論文にある。
 「漢字かなまじり文の文字連続」(国研報告46
 「電子計算機による国語研究Ⅳ」・昭和47年
 刊)
 調査の目的は、(1)漢字かなまじり文で、漢
 字は、意味の切れ目や語のまとまりを示す役
 割を果たしているか、(2)かな表記語の増加に
 よって、漢字からその機能が失われつつある
 とすれば、それは何かということである。
 かりに、意味のまとまりを文節という単位
 で置きかえることができるならば、文節が漢
 字で始まり、かなで終わるといふパターンが
 もっとも望ましいことになる。新聞の文章を
 資料として、文字構成をパターン化してみた
 結果が表9である。
 すなわち、文節が漢字で始まり、かなで終
 わるパターンは、約六十パーセントを占めて
 おり、おおよそ、その原則は守られている。
 しかし、かなで始まる文節も、約三十パーセ
 ントあり、その前後には、かなの連続が起こ
 る可能性がある。そこで、かなで始まる文節
 の前後の環境を分析したところ、次のような
 現象がたしかめられた。
 (1)ひらがな表記される、名詞・動詞の大部
 分は、出現頻度の高い語(こと・もの・

表9 漢字とひらがなのみからなる
文節の種類と出現数

類 型	出 現 数	(百分比)
漢字で始まる文節		
■■■■■	379	(7.7)
■■■□□	2,978	(60.4)
■■■□■	62	(1.3)
■■■□■	3	(0.1)
小 計	3,422	(69.5)
ひらがなで始まる文節		
□□■■■	7	(0.1)
□□■■■	82	(1.7)
□□■■■	—	—
□□□□□	1,415	(28.7)
小 計	1,504	(30.5)
計	4,926	(100.0)

このような研究は、表記論としても不可欠のものだが、言語の機械処理に理論面でも実

測される。
(4)ひらがなの中には、文節の終わりに出現する確率の高いものがあり、意味の切れ目を示す機能を持つものがあることが推測される。

する・なる」など)によって占められ、その語を含む、出現確率の高い文字列を作りやすい。
(2)接続詞・連体詞・副詞などは、文のはじめや、読点のあとに出現しやすく、切れ目を示す表記記号とともに用いられる。
(3)ひらがな表記される動詞・形容詞の直前には、漢字やかたかなを含む文節がきやすい。

3. 語表記の研究

際面でも資するところが大きいと思われる。

語表記の調査は、漢字調査とともに、語彙調査と密接な関係を持っている。前節に述べた研究が、語の表記形式が文字列中でのどのようなパターンを形成するかを問題とするのに対し、語表記の研究は、語そのものの表記形式を直接の対象とする、表記研究の一分野である。分析の項目としては、(1)表記形式の種類・(2)表記形式のゆれ・(3)表記形式と語の性質(語種・品詞など)の関係などがあげられる。国研では、これまでに、総合雑誌の調査と現代雑誌九十種の調査の際に、語表記についての調査を行なっているが、まとまった分析としては、発表していない。現在の新聞調査では、漢字調査と同規模の標本を対象に、調査が進められている。以下に、そのデータから、興味ある例をいくつか抜き出して紹介する。

- (1)漢字が対立するタイプ
- ① 定年 四三
 - ② 荷揚げ 三 五
 - ③ 年齢 一〇二 三四一
 - ④ 〇〇歳 〇〇才 二七三
 - ⑤ 年令 四三 三
 - ⑥ 〇〇才 二七三

- ⑤ 長編 二六
 - ⑥ 過酷 四
 - ⑦ 長篇 二二
 - ⑧ 奇酷 三
- ①・②は、新聞では標準形が決まっているのに、ゆれが見られる例である。③・④は、一般社会での慣用表記が、新勢力として対抗している例である。⑤・⑥は、表外漢字の表内漢字による書きかえが安定していない例である。

(2)漢字とかなが対立するタイプ

- ⑦ 豚肉 一四
- ⑧ 親睦 二三
- ⑨ ブタ肉 八
- ⑩ 親睦 二
- ⑪ せつかく 三五
- ⑫ 上手 一九
- ⑬ 折角 四五
- ⑭ じょうず 一八
- ⑮ 上げる 七六
- ⑯ あげる 五六
- ⑰ 犯す 一一
- ⑱ 侵す 二七
- ⑲ 掲げる 五七
- ⑳ 冒す 二二

⑦・⑧は、いわゆるませ書きの例で、⑧は、表外漢字のかな書きに対する抵抗を示している。⑨は副詞の例である。⑩は、「改訂当用漢字音訓表」の付表にある語だが、昭和四十一年当時、漢字表記を標準形としていた新聞もあるようだ。⑪・⑫は、異字同訓の例である。

- (3)ひらがなとカタカナが対立するタイプ
- ⑬ おしゃれ 七七
 - ⑭ ショウガ 八
 - ⑮ オシャレ 一三
 - ⑯ しょうが 五

⑮ カズノコ 六 ⑯ おえら方 二
 かずのこ 二 オエラ方 一

なんらかの理由で、かな書きをする場合に、ひらがなとカタカナのいずれを選択するかによって生ずる対立である。⑯は、まぜ書きの例である。

(4) 複合タイプ

風刺	七	缶詰	一一
⑰ 諷刺	三	カン詰	四
ふう刺	一	カン詰め	三
大ぜい	七	⑱ カンづめ	二
大勢	六	かんづめ	二
多勢	五	かん詰	一
おおぜい	四	カンヅメ	一
キメ手	一三	小皿	五
⑳ 決め手	一〇	㉑ 小ザラ	二
きめ手	七	小ざら	一

このタイプは、(1) (3)のタイプが二つまたは三つ組み合わさったもので、このようにいくつもの表記が生ずる理由は、簡単には説明しがたい。

新聞では、表記形式が一定していると思われがたが、実際には、右のような種々のタイプが存在する。もちろん、このような複雑性が新聞自身の不統一にのみよるものではなく、広告や社外寄稿者の存在がその一因とな

っていることは否定できない。むしろ、新聞でさえ、統一された表記というものが容易に行なわれにくいと解釈すべきで、日本語の表記法の複雑さの一端をかいま見たにすぎないのかもしれない。

4. 語構成の研究

漢字と語との対応関係を記述することは、必然的に、漢字によって表わされる言語単位どうしの結合関係の記述に発展する性格を持っている。すなわち、語構成論である。語構成についての研究は、語彙調査の分析として、すでに行なわれているが、ここでは、漢字を中心とした語構成研究について紹介する。

所員林四郎は、「漢字機能度の研究」で作成した「総合漢字用列表」を用いて、漢字の用法を記述する一つの方法を提唱した。(昭和48年春季国語学会における研究発表。)

その内容は、次のようなものである。漢字が表わす意味を、なるべく少数の基底語としてとらえ、基底語が成語中の一方の単位と結合する際の文法的関係を基底句と考える。そして、成語中の位置関係を変形基底句とよび、それを可能にする深層構造中の位置を原形基底句とする。変形基底句は、さらに、さまざま

まの語化形式を生み出すことによって、多くの成語を生成する。このように漢字と成語の関係をとらえることによって、漢字の用法を記述しようというのがその骨子である。この方法の特徴は、漢語・和語を問わず、漢字によって表記された語の構造を、原形基底句からの変形操作によって記述する点にある。

所員野村は、複合語の語基がどのような順序によって結合するかをパターンとしてとらえ、それを一般式化することによって、語構造のタイプの出現確率を求めた。さらに、字音系語基およびその一次結合形の形態的・意味的特徴を分類することによって、二次結合した三語基からなる語の分析を行なった。

▽右の内容は、左記の論文にある。

- ① 「複次結合語の構造」(国研報告49)「電子計算機による国語研究Ⅴ」(昭和48年刊)
- ② 「三字漢語の構造」(国研報告「電子計算機による国語研究Ⅵ」所収予定)

以上に見たように、漢字の研究は、文字論はもとより、表記論・語彙論・意味論などとも関連する。大量調査による豊富な資料をもとに、このような研究を進展させることは、現代語研究に大きな意味を持つと思われる。

(野村雅昭)